International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centres
Japanese Branch

No. 47

NEWSLETTER

国際音楽資料情報協会日本支部

May 25 2013

ISSN 1347-7277

IAML 日本支部 30 周年記念事業報告・例会レポート

30 周年記念事業「現職音楽ライブラリアン研修経験に関する調査」報告

― 本調査結果から考えること ―

記念事業委員会
伊藤真理
加藤信哉

1. はじめに

国際音楽資料情報協会日本支部（以下、IAML-JP）は、創立 30 周年記念事業として「音楽ライブラリアン養成プロジェクト」を 2010 年総会にて採択した。会員数が伸び悩む中で、大規模な記念行事を実施することは困難であるが、今実施することで意義が増すと考えられることをテーマとすることとなった。それだけ会員間で本テーマの緊急性を共有していたといえよう。事業の趣旨や内容等については、当時の総会資料や本誌 42 号「日本支部 30 周年記念事業経過報告」（以下、「経過報告」）でまとめられている [1]。確認しておくと、本事業の目標は、“音楽分野の主題専門性を考慮したサブジェクトライブラリアンに必要とされる資質（コアコンピテンシー）を明確にし、それに基づいて音楽図書館員養成について関連団体に働きかけを行うこと”である。そのためには、“現在の日本の図書館員を取り巻く養成や雇用状況を反映させて検討することが必要”なのである。

「経過報告」で説明したように、具体的な事業活動では国内調査に重点を置いた。これは、本事業の目的のためには、日本においてどのような人材養成が求められるのかを明らかにすることが重要だからである。現時点（2012 年度末）では、第 1 ステップとして計画した本稿標題の調査（以下、研修アンケート調査）が終了している。諸事情により、当該調査を開始するまでに予想外の時間がかかり、予定通りに本事業の計画案を実施することは難しい状況になりつつある（この点についても「経過報告」で説明）。そのため、記念事業委員会としては、本調査報告をもって一旦 30 周年事業の区切りをつけたいと考えている。

なお、研修アンケート調査結果の分析については、日本図書館情報学会第 60 回研究大会で発表を行った [2]。当会員を含む一般に対して本調査研究を周知できるだけでなく、図書館関係者にもよく知られていない音楽図書館界について認識を高める良い機会だからである。発表要綱は研修アンケート調査協力関係団体に配布済みである。そのため、本稿は事業報告を兼ねているものの、上記研究発表の内容との重複を避けるために、調査結果の概要を報告することとした。そのうえで、近年の図書館界の動向なども見据えながら、これから音楽図書館関係者がどのように行動していくことが求められるのかについて検討したい。

2. 現職者の研修に関する調査

2.1 調査目的と方法

冒頭でも述べたとおり、当該事業では、国内の図書館を取り巻く状況を反映した適切な音楽ライブラリアンの養成を検討することを目的としている。これまで、海外の音楽ライブラリアン養成に関する概説[3]や、音楽図書館協議会（以下、MLAJ）の研修活動[4],[5]についての論文がある。しかし、音楽図書館現職者が、現在提供されている研修をどの程度受講しているのか、また音楽関連の研修以外についての受講状況はどうなっているのかについて調査されていない。国内での音楽ライブラリアン養成は、司書課程では実質的に行われていないことから、現職者の研修受講の実態から課題を分析することになる。そこで、現職の音楽図書館職員を対象として調査を実施することとした。

周知のように、音楽図書館サービス関連の研修は、MLAJ や IAML-JP による研究例会が主となる。IAML-JP による研究例会は一般からの参加が可能であるが、MLAJ の研修は加盟館を対象としている。そこで、研修受講者の状況を現状に沿って把握できるように、調査協力者の勤務先を MLAJ 加盟館に限定し、MLAJ に協力を求めた。質問紙法によって調査することで、現職者の状況をできるだけ網羅的に把握できるよう工夫した。

また、音楽図書館での雇用の多様化が増加していることをふまえ、調査対象者は専任職員（以下、専任）および非専任職員（非常勤職員、派遣職員等を含む。以下、非専任）とした。非専任が勤務時間以外に回答しやすい環境も考慮して、調査票をウェブ上で 2011 年 9 月～ 2012 年 1 月まで公開した。

調査票は 2 部から成る。第 1 部:回答者について、第 2 部:研修受講経験について、である。第 1 部では、勤務経験、音楽および外国語に関する知識、PC やデータベース利用経験について訊ねた。第 2 部の質問項目は、勤務先での館内研修、図書館関連機関主催の研修、自己研鑽に関する状況について、である。非専任の場合は派遣や委託会社での職場研修についても訊ねた。さらに、提供されている研修へのニーズを知るために、回答者自身が不足していると考える知識やスキル、および音楽ライブラリアンに必要と考える知識やスキルについて質問した。

2.2　調査結果と分析

（1）調査回答者

本調査の有効回答数は、専任 19 件、非専任 54 件だった。非専任から比較的多くの回答を得ることができたのは、委託・派遣業務を請け負っている会社に協力を得ることができたからである。統計資料[6],[7]によれば、MLAJ 加盟館の専任は総計 132 人、非専任が 113.9 人なので、本調査回答者は専任が全体の 17%、非専任が 58%となる。しかし、参照した統計資料には委託業務導入館の非専任人数が反映されていないなど不明な点もあるため、上記の数値は参考データにとどめる。

調査回答者の属性は、表 1[8]のとおりである。専任・非専任ともに、新人からベテランまで含まれていた。回答者が担当する業務の偏りは特になく全般にわたっており、データベースの利用や経験にもほとんど差がなかった。

表 1.　調査回答者

	専任	非専任
勤務先の館種	音楽大学附属図書館 私立専門図書館	音大附属図書館，一般大学附属図書館，公立専門図書館，私立専門図書館
勤務状況	3年以下の新人から30年以上のベテランまで 有資格者半数	
担当業務	図書館業務全般 音楽資料やデータベースも扱う	
音楽の知識	音大卒，習い事・趣味あり 音楽史・理論についてよく知らないという回答あり	
外国語（英語，仏語，独語，伊語，その他）	仏語以外回答あり	すべてについて回答あり
業務でのPCやデータベース利用	ほぼ日常的に経験	ほぼ日常的に経験 まれに利用するという回答者あり

（2）研修経験

館内研修、館外研修ともに、総じて研修受講者が少なかった。研修という形式での人材育成が十分に実施できていない可能性があることを示している。これは専任・非専任同様の傾向が見られた。

研修を受講している回答者のうち、専任の場合は、音楽関連機関の研修と大学図書館を対象とした研修参加がわずかにあった。しかし、日本図書館協会ステップアップ研修（以下、JLA）、大学図書館支援機構（以下、IAAL）、デジタルライブラリアン (以下、DL) 研修は受講していなかった。非専任の場合は、所属会社の社内研修でのリーダー研修受講が 94%だったのに対し、音楽図書館関連の研修を含む館外研修の受講経験はほとんどなかった。

このように、研修受講の機会が少ない状況のなかで、専任・非専任ともに、日常業務において講習会の報告、機関誌回覧、業務中の指導や勉強会などが実施されていた。調査回答者が受講している内容のうち、著作権、情報検索、学際的な領域に関する主題などについては、音楽と関連させることが望ましいが、音楽関連機関以外での研修の活用を検討する余地も考えられる。

自己研鑽による研修受講について、専任・非専任ともに、調査回答者については受講経験がほとんどないと考えてよいであろう。非専任では、そもそもどのようにして研修に参加すれば良いのか分からないという記述があり、本人の意志とは別に環境が整っていない可能性も示唆されている。回答には文献からの情報収集や資格取得、音楽関連の習い事などが記され、研修への参加以外での努力が見られることが明らかとなった。

（3）研修に対するニーズ

業務に対する自己の知識不足の認識内容、希望している館内（社内）研修の内容、研修に関する意見の 3 点について訊ねた。回答者自身が自己の知識不足と感じる事項や、希望する館内研修内容については表2のとおりである。

自己の知識不足を感じている事項については、音楽や音楽資料の知識など、専任・非専任ともに、類似の事項があげられた。それに対し、研修に対する希望では、専任と非専任ではあげられた項目に差異があるように見える。しかし、どちらも日常的な問題解決に関することなど、実践的な知識やスキルがあげられた。目録に関しては、非常に強いニーズがあることが明確になった。

研修に関する自由記述では、音楽図書館や音楽資料に関する研修が一般の研修では開講されておらず、館内研修や自己研修での必要性が示された。非専任からは、音楽資料目録とともに、頻繁に尋ねられる音楽関係のレファレンスを扱うサイトや演習形式の研修への希望、仕事の効率化の重要性など現場で役立つ内容を研修に求めていることが浮き彫りになった。

表２．研修ニーズ

	自己の知識不足		研修希望	
	専任	非専任	専任	非専任
音楽の知識	●	●	●	
音楽資料に関する知識	●	●		
音楽図書館	●			
蔵書構成			●	
目録	●	●	●	●
レファレンス	●	●		●
日常業務の問題解決の情報交換			●	●
情報検索方法				●
データベース				●
障がい者対応				●
著作権		●		●
展示				●
図書補修				●
IT	●	●		●
マナー				●
コミュニケーション		●		
語学	●	●		●

（4）音楽ライブラリアンに必要な知識やスキル

音楽ライブラリアンに必要と考える知識やスキ

ルに関する質問は、伊藤・松下の「音楽図書館関連機関による研修分析」結果[9]をもとに、選択式回答とした。上記研究では、これまで実施されてきた研修内容は、MLAJ が現職者養成のために掲げてきた５つの目標[10]に沿ったものであったと推測している。そこで、本調査でもこれらの項目を提示して、現職者のニーズとのマッチングを見ることができると考えた。

専任と非専任が必要性を認識している項目では、統計的に類似の傾向があることが確認できた。双方が選択した項目数の平均が 50%以上を認識の高い事項とし、10%未満を認識が低いと見なして表３にまとめた。認識の高い事項は、選択肢の全領域にわたっていた。特に、音楽資料に関するメディアの流通やサービス、音楽専門知識、演奏経験、データベース、外国語の知識などがあげられた。認識の低い事項は、音楽図書館で扱われることの少ない資料媒体に関するサービスや経営についてであった。

表3．音楽ライブラリアンに必要とされる 知識やスキルについての認識の差

	認識が高い事項		認識が低い事項
メディア	資料特性：図書，楽譜，AV，手稿資料		資料特性：その他
	二次資料・オンラインDB	保存	出版流通：政府刊行物，その他
	AV資料の利用機器	出版流通	
サービス	資料選択：図書，楽譜，AV	情報検索技術	資料選択：その他
	レファレンス	著作権	
	図書館間協力		
組織化			メタデータ：ネットワーク情報資源，アーカイブ，その他
経営	広報		コンソーシアム
専門知識	専門知識・教育	外国語：全般	外国語：西語，その他
	学部レベルの音楽知識	演奏経験	資格：学芸員，情報検索基礎，情報検索応用，初級SA
	司書資格		
その他	DB運用管理		
	図書館業務システム運用管理		

2.3　調査のまとめ

以上の調査結果から、３点について明らかとなった。それらは、

(i) 技術的な内容に対する研修ニーズ

(ii) 専任・非専任への同等の研修受講の必要性

(iii) 研修内容と受講方式の精査の必要性

である。

１点目については、館内研修の受講の比重が小さいこと、調査回答者が日常的な業務に関する知識の不足を感じていること、定期的な短期間の研修を希望していることなどから、業務に関する研修を受講していても継続的なニーズがあることが分かった。現職者の担当業務と研修の実態とに乖離があることや、日常業務内の指導だけでは十分ではない可能性が示された。

２点目は、調査結果から専任・非専任双方の担当業務に差がなく、音楽ライブラリアンの持つべき知識やスキルに関する認識もおなじであることから、同等の研修を受講する必要性が推測できる。しかし、非専任からは館外研修の余裕がないこと、学習方法が分からないなどのコメントがあり、研修体制に工夫が必要であろう。

３点目については、本調査結果では音楽の専門知識や外国語の習得に関する点が該当する。これらの事項の必要性については、自己の知識不足あるいは研修に対する自由コメントにおいても指摘されていた。しかし、研修ニーズとしては専任からのみだった。非専任からの要望がなかったのは、これらの事項について自己研鑽で補えると考えられているからかもしれないし、あるいは研修参加の体制での問題がここにも影響しているからかもしれない。本調査では、回答者数の限界により信頼性の高い分析が困難なため、その他の内容も含めてさらに精査が必要である。

3.「音楽ライブラリアン養成」提言に向けて

本調査では、現職者の研修受講状況に対して調査回答者が必要と考えている研修の内容を照合し、さらに専任と非専任に区別して分析することによって、現職者のスキルアップでの問題点を明確にすることができた。

しかし、調査回答者数に限界があり、本調査結果のみで系統的な研修のあり方を検討することは

困難である。調査にあたって事前に調整を行ったにも関わらず、特に専任職員の回答数に関してこのような結果になったことについて、慎重に再考する必要があると考えている。

本調査では、事前に MLAJ に対して組織的な協力の依頼を行っている。そのことをふまえると、専任の回答者数が少ないのは、単に協力に後ろ向きだったというだけではなく、専任職員が置かれている状況が非常に深刻であることが推測できる。なぜならば、MLAJ 自体が人的資源の問題について非常に高い関心を持っていることが分かっているからである。

MLAJ による 2009 年秋の研修会では、音楽図書館での業務委託・人材派遣がテーマだった[11]。図書館専任職員の減少や、図書館サービスにおける委託・派遣での職員体制による問題が指摘されているなかで、加盟館に質問紙調査を実施し、問題共有を図ろうとしたものである。同調査によると[12]、約 7 割の加盟館が委託または派遣を活用していた。これらの館で、委託職員や派遣職員に対してスキルアップ教育を実施している館は皆無だった。調査報告と合わせて行われた事例報告では、派遣職員や委託職員の音楽知識の有無によって業務に大きく影響があること、専門性の確保の問題が提起された。専任職員が高い関心を持っているであろう研修アンケート調査への協力に困難があるとすると、上記の問題がさらに深刻化している可能性が否めない。したがって、本調査の課題である専任職員の現状を把握するためには、別途工夫が必要となる。この問題は、本事業を計画した時点で把握できなかったことであり、現記念事業委員会で扱うことが難しい。そのため、本事業については一応の区切りをつけ、現状の全体像を把握するための計画を検討し直して調査を続行したい。その場合、どのような体制が望ましいのかについては、新たに検討する必要がある。

しかしながら、本事業に関しては、2010 年総会で説明したように、音楽ライブラリアン養成を実行可能とするための体制作りにおいて社会的に効果があると期待される。本調査結果と図書館界の動向をふまえ、今後取り組むことが望ましい事項として、下記の2点を提案したい。

1点目は、司書養成の現状をふまえ、音楽ライブラリアン養成を自分たち（音楽関係者）で担うという意識を高めていくことである。日本図書館情報学会では、2003 年度から「情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する総合的研究（LIPER）」（以下，LIPER）プロジェクト[13]を実施してきた。当該プロジェクトは現在、LIPER3 に引き継がれている。一連の LIPER プロジェクトで確認されているとおり、現在の司書資格は、その法的枠組みとしては公共図書館に適用されているものの、公共図書館以外の場においても図書館員の基礎的な資格と考えられるということである。ちょうど本年（2013 年度）から昭和音楽大学で司書課程カリキュラムが始まった。これまでも同様の動きがあったものの実現しなかっただけに大変うれしいニュースである。昭和音楽大学では、厳密に図書館法施行規則に則り、公共図書館での音楽情報サービスを想定しているとのことである[14]。しかし、LIPER での考え方を踏襲するなら、専門図書館を想定した教育を進めていくことも可能であろう。それは文部科学省が推奨する各大学の特色を活かしたカリキュラムと合致するように思われる。さらに、音楽分野の情報専門職養成の基礎として位置づけることも望まれる。そして、教育機関で組織的なカリキュラムを提供するには、やはり音楽ライブラリアンのコアコンピテンシーを明確にしておくことが肝要である。本事業がこうした動きと連動できることによって、社会的効果が高まるであろう。

2点目は、IAML の国際機関としての役割を発揮することである。このことは、1点目の意識の向上にも関連する。例えば、海外のグッドプラクティスを積極的に紹介するといった、IAML ならではの機能をもっと活かす余地があると思われる。これまで

も継続的に IAML 年次大会報告を MLAJ ニューズレター（2003 年廃刊）や本誌で紹介することは行われてきた。この実績を活かし、さらに現職者に関心の高いテーマを絞り込んで詳細な報告をすることで、日常業務にも役立つ情報を提供することができるのではないだろうか。会員の約7割が音楽研究者である IAML-JP が、音楽図書館サービスに最も効果的に貢献できる方法の一つであろう。上述のように日常業務に追われ、時間的に余裕がない現職者にわかりやすく音楽図書館関連の海外情報を提供することによって、継続的な研修の一環を担うことが可能となる。間接的に音楽ライブラリアン養成に寄与することにつながると考えられる。さらに、MLAJ 加盟館を含めた音楽図書館と、より一層の緊密な関係を築く一端ともなる。音楽ライブラリアン養成という大命題に立ち向かうには、共通認識のもとに小さなコミュニティである音楽図書館関連諸機関が手を携えて支え合っていくことが肝要であることはいうまでもない。

注】

[1] 加藤信哉 , 伊藤真理「日本支部 30 周年記念事業経過報告」『IAML ニューズレター』no.42, 2011, p. 2-5.

[2] 伊藤真理 , 加藤信哉「現職音楽ライブラリアンの研修経験に関する実態調査」日本図書館情報学会第 60 回研究大会 , 2012 年 11 月（於九州大学）

[3] 加藤修子「図書館・情報学教育における音楽分野の主題専門教育」『音楽情報と図書館』音楽図書館協議会 , 1995, p. 12-25.

[4] 市川啓子「わが国における音楽図書館員の養成と研修 : その問題点と方向性を探る」『音楽情報と図書館』音楽図書館協議会 , 1995, p. 26-48.

[5] 松下鈞「専門図書館員の養成 : 音楽図書館界の場合」『図書館雑誌』Vol. 96, No. 4, 2002, p. 238-240.

[6] 日本図書館協会『日本の図書館 : 統計と名簿』日本図書館協会 , 2011, 518p.

[7] 専門図書館協議会出版委員会総覧小委員会編『専門情報機関総覧』専門図書館協議会 , 2012, 793p.

[8] 前掲 2) での発表スライドより再掲。表 2, 表 3 についても同様である。

[9] 伊藤真理, 松下鈞「音楽図書館関連機関による研修プログラムの分析」日本図書館情報学会第 58 回研究大会 , 2010 年 10 月（於藤女子大学）

[10] 前掲 5).

[11] 音楽図書館協議会「委託、アウトソーシングによる人事やサービスへの影響について」秋の研修会（国際音楽資料情報協会日本支部共催), パシフィコ横浜 , 2009.

[12] 前掲 11). 当日の配付資料による。

[13] 日本図書館情報学会「情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する総合的研究（LIPER）」URL: http://www.jslis.jp/liper/index.html（参照 2013-05-08）

[14] 岸本宏子「音楽大学における司書養成について : 昭和音楽大学の場合」『IAML ニューズレター』no. 44, 2012, p. 8-10.

＊本報告は来たる 6 月 2 日（日）、総会終了後に開催される第 54 回例会で改めて発表､討議されます。ご参加ください。(p. 10 参照)　（編集部）

＊＊＊

==News

展覧会「五線譜に描いた夢 ― 日本近代音楽の 150 年」開催（予告）

今秋、特別展「五線譜に描いた夢― 日本近代音楽の 150 年」が東京オペラシティ・アートギャラリーで開催される。幕末維新期より今日に至る日本の近代音楽 150 年の激動の歩みをダイナミックに描く。資料は明治学院大学図書館付属日本近代音楽館蔵書をはじめ全国の資料館、個人から提供され、音楽資料展として例をみない規模のものとなろう。東京オペラシティ文化財団、明治学院大学、NHK プロモーション、日本経済新聞社共催。会期は 10 月 11 日（金）より 12 月 23 日（月・祝）まで。

【傍聴記】

IAML 日本支部第 53 回例会

（2012 年 10 月 20 日　於東京音楽大学）

小 倉 洋 子

今回の例会では、「楽譜『原典版』をめぐって」をテーマに、ベーレンライター社で原典版楽譜の編集に長年携ってこられたダグラス・ウッドフル＝ハリス氏をメイン・ゲストに迎えての講演（通訳・木村小百合氏）と、同社のメンデルスゾーン《ヴァイオリン・ソナタ集》（原典版、2009 年）を校訂した星野宏美氏によるその過程や成果の一端の紹介があった。当日参加の 40 人余のなかには IAML 会員以外の姿も多く、今回の講演は楽譜に向き合う様々な立場の人の関心を引いたようである。会場ではアカデミア・ミュージック株式会社によるベーレンライター原典版の展示やカタログ配布があり、その場で実物を手にとることもできた。

☆

前半は星野氏による講演。メンデルスゾーン≪ヴァイオリン・ソナタ集≫原典版の三曲めとなるヘ長調ソナタは、それまで校訂譜としてはユーディ・メニューインによるやや恣意的にも見える版（ペータース、1953 年）しかなかった。これに対し、星野氏と共同校訂者のヴァイオリニスト桐山建志氏は、作曲者の意図に忠実な楽譜の作成をめざした。自筆譜として 1838 年の初稿とパート譜、1839 年の断片的改訂稿が残るものの決定稿は存在せず、最終的に仕上げられることがなかったこの作品を、一曲を通して矛盾なく演奏可能な楽譜として完結させるにあたっては様々な問題に直面したという。今回はそのうちのわずか数例が披露されたにすぎなかったが、それだけでも、校訂作業がいかに緻密

星野宏美氏

で、広範な知識の蓄積の上になされる気の遠くなるような作業であるかを垣間見ることができた。また星野氏は、自筆譜を検証すればするほど、このソナタが仕上げられなかったという事実や作品としての未熟さを実感し、そのような作品を校訂することへのジレンマすら感じていたそうだ。しかし、こうした知られざる作品を演奏者や聴衆に広く提供することで、音楽の捉え方の奥行きが増すことにつながる、とも語っていた。最後に「実際の演奏を聴いて、メニューイン版とこの原典版とどちらが面白いか？」という質問には、「あまりに深く原典版に関わったためになかなか客観的判断はできないが、今後二つの版がどのように生き残り、どのような役割を果たしていくのかを見守りたい」とのことだった。

☆☆

休憩をはさんだ後半ではまず、ベーレンライター社のセールスとマーケティング担当のコリン・フォテナー氏により、同社の歴史や原典版楽譜の企画、校訂、印刷など、出版までの過程について DVD 映像とともに説明があった（約 20 分のこの映像はアカデミア・ミュージックの HP でも公開中）。

続くウッドフル＝ハリス氏の「原典版とは何か？」という講演では、『原典版 Urtext』がどのような意味を持つものであるかが、い

くつかの事例とともに解説された。まず、原典版とは「学術的検証が加えられた版」であるとし、それは単に楽譜として存在するのではなく、その楽譜を作るに至った資料の出典、歴史的背景、演奏伝統などの様々な情報すべてが校訂報告として記述されていることを意味するという。こういった情報の量は、作曲者によっても作品によっても実にまちまちである。場合によっては、楽譜自体に書かれている「〔演奏〕しなければならない」ことを伝えるだけでなく、書かれていない「することができる」仮説を導き出すことも必要となり、その経緯を校訂報告として記録することも大切であるという。このような様々な情報を与えすぎることで演奏者の自由な表現を妨げてしまう懸念もあろうが、今日の演奏者は様々な版の違いをむしろ楽しみ、その中から自分の表現を作り出しているようにも思われ、こうした情報提供こそがベーレンライター原典版の信念である、と結んだ。

その後、参加者との意見交換の場が設けられた。「校訂譜の歴史を辿ると、様々な記号を楽譜に書き込んでいった時代があり、逆にそれらを一切取り払った例もあるが？」という指摘に対し、ウッドフル＝ハリス氏は「しかしそれはごく単発的なことと思われ、原典版は情報を表には出さずに校訂報告に書き込むものである」と再度強調した。次に「ベーレンライター社のなかでクラシック音楽出版物が占める割合は？」という質問には、「ドイツ国内では約 70%、海外向けでは約 95%」との回答があり、さらに続けて「ベーレンライターといえば、MGG、バッハやモーツァルトといった大作曲家の全集、自筆譜ファクシミリ版等の図書館に置かれるような大型本で世界的な評判を得てきた。実際に人気のある曲の演奏用楽譜は全集の中から取って個別出版もしている。それに加えさらに約 15 年前から、全集とは別に一つ一つ校訂した原典版を出版することも新たに展開

Douglas Woodfull=Harris 氏

している。そうすることで、従来ではなかなか出版しえなかった作品も出版されるようになってきている」という説明もあった。「全集で並び比較されるブライトコプフ社との経営戦略等の違いは?」という問いには、「ブライトコプフは、19 世紀初頭から第二次世界大戦前頃の時代の作品の出版については今日でも他社の追随を許さないと思うが、最新の学術的検証を反映させるという戦後の全集に対する考え方とは若干異なるように感じている。ほかにも各社から最新の学術的検証の反映をうたう版が出ており、それらの善し悪しを評価するつもりはないが、原典版の編集で大事な三要素は、学術的検証（＝だれが校訂したか）、どの版が使われているかという事とともに、実際に演奏者と一緒に検証していくことと考えている」と述べた。

☆☆☆

今回、原典版の校訂・編集の立場からのお二人の講演から、原典版を読み解くことの面白さにあらためて気づかせてもらった。この例会には、会場となった東京音楽大学付属図書館のご協力もあり、学部 1、2 年生といった若い学生さんの参加も多かったようだ。これから自分の演奏スタイルや研究テーマを模索、確立していくであろう彼らにとっても、原典版に向き合う姿勢を示してくれたこの講演は、大変有意義なものであったに違いない。

2013 IAMLウィーン会議・日程

Monday, 29 July

Music libraries in Vienna
Notation and classification
Austrian composers' archives and documentation centres: Mozart, Mahler, Schönberg
Répertoire International de la Presse Musicale (RIPM)
Digitising sound
Music bibliography online
Composers and their libraries
Using music services for education

Tuesday, 30 July

What's new: Libraries, services and promotion
Collected editions
Roundtable discussion between the Board and National Representatives
Poster Session I
Orchestral sheet music: Publishing, performing and… tablet computers!
Promoting access to music archives
Répertoire International de Littérature Musicale (RILM)
Music libraries and provenance research
Discovery systems
Libraries and musical dissemination
Collection development in libraries of music teaching institutions
Public Library Tour and Presentation
Concert　Musikverein

Wednesday, 31 July

Plenary session
Aristocratic music collections
On-line catalogues and collaboration
Répertoire International de Littérature Musicale (RILM)
Excursions
　The Habsburgs and Music
　Following the Footsteps of Viennese Classism
　Vienna: 'Fin de siècle' (Turn of the Century)"
　Eroica and the Heiligenstadt Testame
　Musical Bus Tour of the City
　On the Trail of Haydn in Eisenstadt, Burgenland
　From Mozart to Schönberg: Excursion to Mödling and Baden

Thursday, 1 August

Sources and people – dispersed and linked
Viennese publishers
Répertoire International d'Iconographie Musicale (RIdIM)
Poster Session II
Copyright, free trade, and the music library
Music collections and research
Répertoire International des Sources Musicales (RISM)
Music archives: Sources, tasks, and recent developments
Developing library collection
Répertoire International d'Iconographie Musicale (RIdIM)
Concert Universität für Musik und darstellende Kunst

Friday, 2 August

In the circle of Austrian sacred music
Discovering musical life
Music manuscripts: Ways to approach
Digitisation of music: Projects and perspectives
Farewell dinner Palais Ferstel

ウィーン会議にご参加ください！

7 月 28 日～ 8 月 2 日
www.iamlvienna2013.info

IAML VIENNA 2013

事務局だより

2013 年度総会のお知らせ

本年度総会は下記の通り開催されます。会員諸氏多数のご出席をお待ちしています。

総会

日時　6 月 2 日 (日)　13:30―14:30

場所　東京芸術劇場 6F ミーティングルーム 7

総会にひきつづき第 54 回例会が開かれます。例会プログラムは下記の通りです。会員以外の方も参加できます。お誘いください。

第 54 回例会　14:40-17:00　場所・同上

◎南葵音楽文庫貴重資料のデジタル化――現状と公開にむけて　美山良夫

司会・コメンテータ 金澤正剛

◎ IAML 日本支部 30 周年記念事業「現職音楽ライブラリアン研修経験に関する調査」報告と討議

伊藤真理

加藤信哉

松下　鈞

IAML本部選挙、投票締切は 5 月 31 日

IAML 国際本部の会長および副会長選出のための選挙が 5 月 1 日より実施中です（投票締切は 5 月 31 日）。既報の通り、本年より電子投票方式が採用されています。本部の HP のトップ左側が選挙のためのページ入口。会長候補 1 名、副会長候補 5 名の経歴などが写真入りで掲載されており、会長 1 名、副会長 4 名が選ばれます。

各人はまず、IAML 本部国際版の HP から個人情報を登録して下さい。その後 Vote! のページをクリックすると各個人の別のデータに移動しますので、そこに書かれてある数字によるユーザー名や IAML で設定したパスワードによって選挙が可能になります。電子選挙を望まない方は日本支部事務局長長谷川宛早急にご連絡下さい。候補者の経歴を記した PDF ファイルおよび郵送先が付記された投票用紙を各人宛メールでお送りします。

連絡先　hasegawa@lib.kunitachi.ac.jp

「日本の音楽資料」のデータベース化のための調査研究 (第 2 次) 終了

平成 24 年度文化庁委託業務として日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会が行っていた「日本の音楽資料」のデータベース化のための調査研究が 2013 年 3 月に終了した。この調査には IAML 日本支部から 2 名が委員として、その他 IAML 日本支部の会員が 4 名参加した。2012 年調査は主に 2 種類の作業を行った。第 1 に未調査だった比較的大規模な図書館の所蔵調査を各図書館に調査員を派遣して行った。第 2 に各図書館、資料館所蔵の書誌記入を統一し、典拠ファイルを付し、書誌情報を公開できる段階に至った。1945 年以前の楽譜が網羅されているとは言い難いが、この調査が日本の楽譜出版の実態を解明する上で果たした役割は極めて大きい。なお、報告書は希望者に配布できるため、例会その他の折に事務局長までお申し出下さい。

＝＝会員異動

新会員　嶋田弘美氏

明治学院大学図書館付属日本近代音楽館

退会　加藤修子氏　住川鞆子氏

Newsletter ―国際音楽資料情報協会日本支部
第 47 号

2013 年 5 月 25 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部

〒 171-8540　東京都豊島区南池袋 3-4-5

東京音楽大学付属図書館内

http://www.iaml.jp